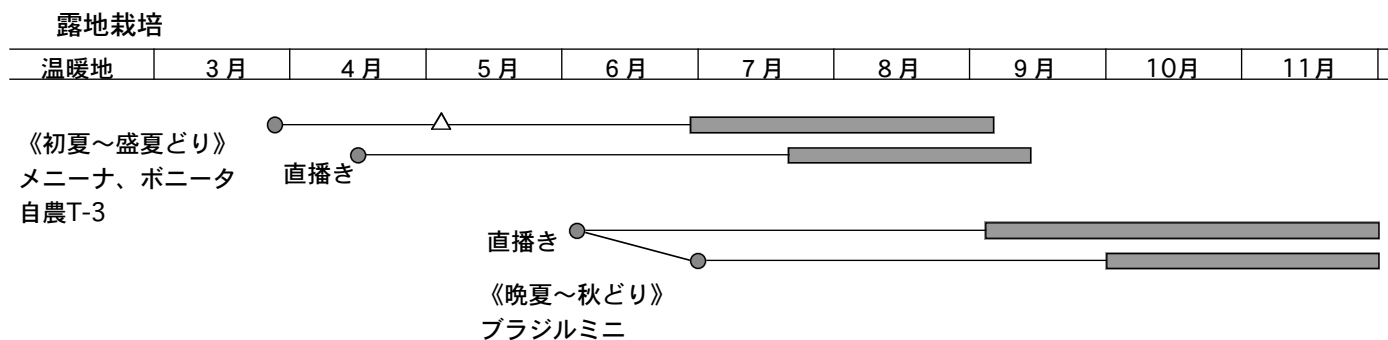


《その特性と栽培のポイント》

[作型と品種の使い分け]



[栽培のポイント]

メニーナ、ポニータは大玉系と中玉系の交配種で、生育の仕方や着果性、果実の大きさは大玉と中玉の中間的特性を備えています。果重は80～100gで大玉より小さく、坦果力があるため上段までよく着果しますが、生育初期に肥料が効き過ぎると、茎が太く節がつまり、栄養生長型の生育となり、着果不良を引き起こします。そのため、生育初期は大玉を栽培する要領で、第3花房開花までは生殖生長が強めになるように元肥を少なくし、灌水を控えめに管理します。着果性は中玉に近い成り方をするので、極端な締め苗づくりをしたり、老化苗にしたりすると中上段の成り込みを悪くします。素直な苗をつくり、本葉4～5枚の若苗定植をして根群の発達を促すことが大事です。

畑の準備（地力で十分に生育できる土壌環境づくり）

《有機物の施用》腐植化をすすめるため、堆肥や緑肥などの有機物はなるべく前年の秋に鋤込む。春の鋤込みは完熟した堆肥を作付け1ヶ月前までに行い、未熟堆肥は表層に敷く。完熟堆肥2～3…/1|、緑肥（エン麦、アカクローバなど）

《草生栽培》畝間にアカクローバやイタリアンライグラスなどの緑肥を生やして土壌を保全する。

《輪作》小麦、大豆を輪作して土壌有機物を増やす。

育成期（第1花房開花まで、健全な根の育成と、生育に適した根圏環境づくり）

《直播き、若苗定植》植傷みを防ぎ、根の活力を高める。

《鞍つき》EM生ゴミ土や刈り草と土を交互に積み上げて作った混土堆肥で鞍つきをつくり、幼苗期の培養土にする。

《粗植》畝間、株間にゆとりをもたせ、根群の発達と茎葉の充実をはかる。

《敷き草》株元に刈草や堆肥を敷いて、根圏に土壌動物や微生物を増やし生物環境を改善する。

自立期（根の活力を高める仕立て方と草勢維持）

《地力に合った仕立て方》生育の調整ができるときは1本仕立てにするが、地力が高く草勢が強くなりやすいときは、仕立て本数を増やし、地上部と地下部の生育のバランスをとる。

《根を生かす整枝法》生育初期の腋芽は根の発達や葉の充実に影響するので、芽掻きを急がず、伸びが遅いようなら第3花房開花まで残しておく。芽掻きは生育に応じて行い、草勢が弱いときは摘除するが、旺盛なときは1葉残して摘心し、新しい芽が吹けるようにしておくとし生育調整になる。側枝を太くしてから摘除や、一斉摘除は根傷みの原因になる。第5花房直下以上から発生した側枝は無整枝にして根群の発達と草勢の維持をはかる。

《刈り敷き》刈り取った野草、雑草を株の周りに敷き草にし、土壌を保全すると共に養分供給源とする。（分解が早いので定期的に行う）

《ボカシ肥の追肥》実の肥大が始まり、確実に着果したのを確認してから追肥をする。追肥は第2花房が着果し、第3花房が咲き始めた時期を目安として、米ぬか主体のボカシ肥（20～30g/|）を10日から2週間おきに2～3回行い、敷き草の上に施用、灌水して新根の発生を促す。

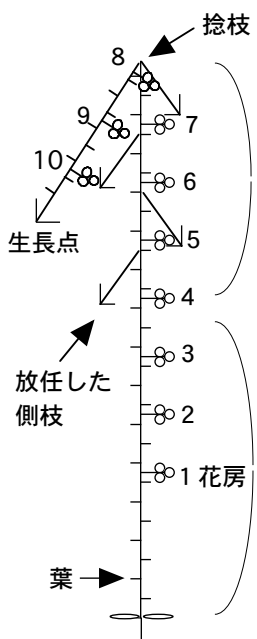
[仕立て方と整枝方法]

自然農法で育成したトマトは根の発達がよく草勢が強いため、肥沃な土では1本仕立てにすると生育調整が難しく過繁茂や生理落果を起こす場合があります。そのため地力に合った仕立て方と整枝方法が必要になります。10a当たり元肥のチッソ成分5…位では1本仕立てでバランスの良い生育をしますが、10～15…で2本仕立て、15…以上では3本仕立てがバランスがよく、多肥になるほど（肥沃な土ほど）仕立て本数を増やした方が茎が太くなりすぎず素直な生育になり、着果も安定します。また、腋芽も草勢が弱く茎が細いときは摘除した方が生育促進になりますが、根の活力をより高めたいときは側枝の1葉を残して摘心し、次の側枝の発生節を残して根の発達を促します。また主枝の頂点を摘心せず捻枝してUターンさせ、中上段から発生した側枝は放任にすると生長点が多くなり根の生長が活発になって、葉がいつまでも若く、草勢が長く維持されて病害虫の発生が抑えられます。

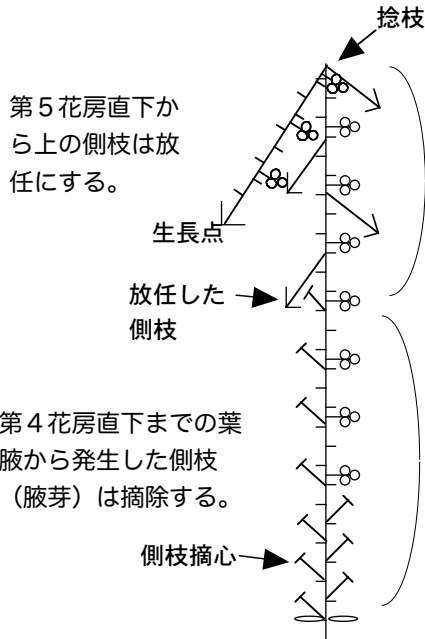
# 【トマトの仕立て方と整枝方法】

メニーナ、ボニータ、自農T-3、  
ブラジルミニ

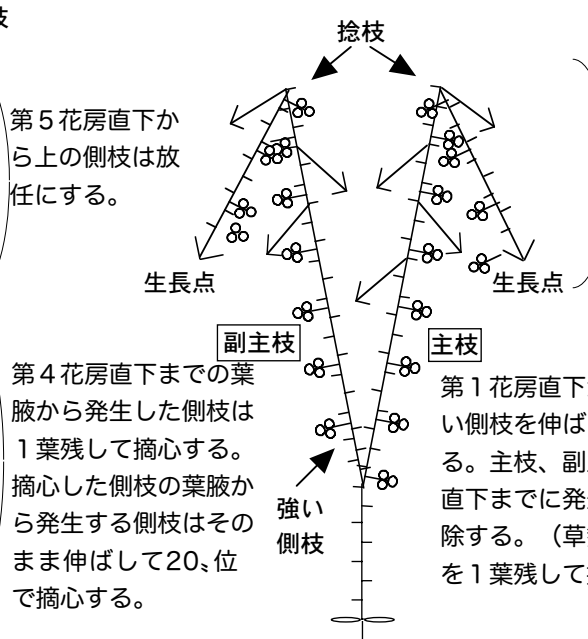
**【捻枝のやり方】** 主枝が支柱の頂点に達したところで、さらに30cm位伸ばしてから、支柱の頂点部分の茎の基部をこれまでの花房と反対方向に45度位の角度で雑巾を絞る要領で軽く捻枝し、Uターンさせて下垂させる。捻枝は晴れた日の日中で茎の水分が少なめのときに行う。茎が太いと傷めやすいので注意。生長点が30cm持ち上がってきたら、湾曲している部分を半回転ほど捻枝して下垂させる。



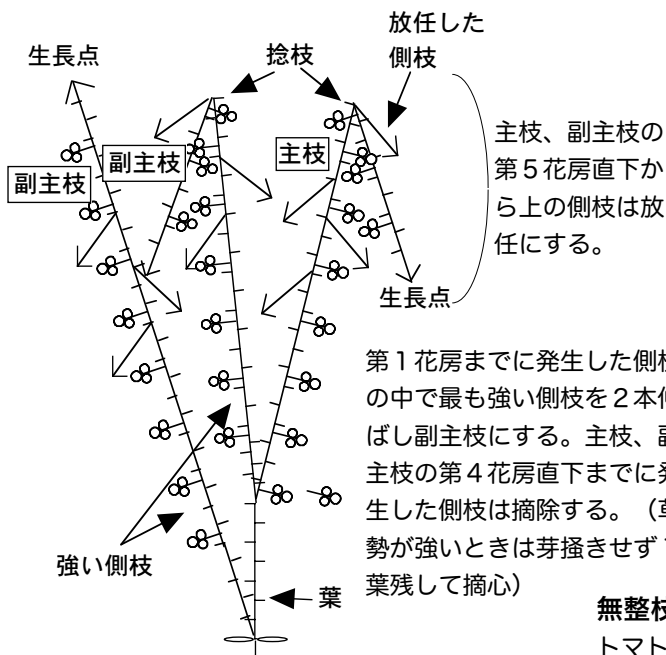
主枝1本仕立て



主枝1本仕立て  
下位側枝1葉摘心

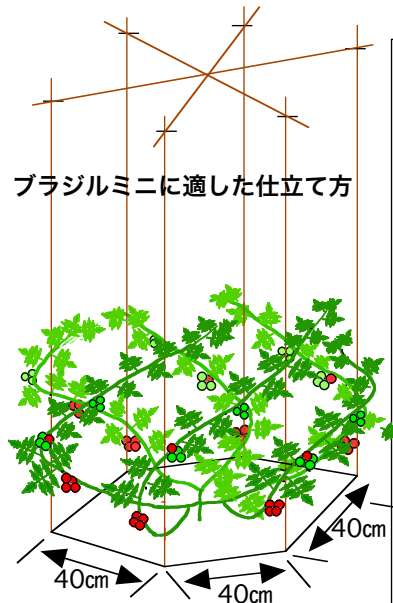


2本仕立て (主枝+側枝)



3本仕立て (主枝+側枝)

主枝、副主枝の中で最も弱い枝を真ん中にし、強い枝を斜めに誘引して生育のバランスをとる。立ちづくりではベットの中央に定植し2条の振り分けになるよう交互に枝を誘引する。



無整枝自然形仕立て

トマトの苗を中心に周囲に6~8角形になるように30~40cm間隔に支柱を立てる。初期は地這で生育させ、支柱まで伸びてきたところで支柱に誘引する。誘引した枝は30cm位伸びたところで花房を上にして倒れるので、倒れた方向に30度の角度で斜めに誘引する。このようにしてらせん状に誘引していく。無整枝にすると草勢が強くなるので、元肥はなるべく少肥にし、株元に敷き草をたっぷり敷いて根群の発達を促す。

## 【トマトの自然樹形】

トマトは匍匐（ほふく）性の植物で茎は地を這うように伸び、子葉節から第1花房までの各葉腋から強い子枝（側枝）を6~9本位発生させ、四方八方に3m位伸びる。茎が土に接している部分から不定根を伸ばし、子枝からも孫枝（側枝）を多く発生させてこんもりとした茂みをつくる。トマトの生長点はいつも立ち上がっており、ある程度伸びると倒れ、生長点がまた立ち上がるという匍匐運動をくり返して生長する。このとき花房はかならず上向きになるように倒れる。第1花房からは3葉ごとに第2、第3と着果していくが、各花房の上の葉は花房を支えるように地面に向かって出葉し、他の2葉は左右交互に水平に出葉する。これらの葉腋から発生した側枝は花房と同じ上向きに発生する。このようにして茎葉が重ならないよううまく受光体勢をとりながら生育する。